

神戸からの集団疎開

アジア・太平洋戦争（大東亜戦争）の戦局が悪化し、本土が空襲の危険にさらされていた昭和十九年（一九四四）、政府は戦火から子供たちを守るため、軍港や軍需工場のある大都市の児童達を農山村に避難させる集団疎開を推進しました。

昭和十九年八月、岡山県は兵庫県から協力依頼のあった神戸市の児童四、三〇〇人の集団疎開受け入れを承諾し、県内の適当な宿舎を調査し、九月から受け入れを開始しました。

鏡野町域では、芳野村に多聞国民学校の女子児童を受け入れることとなり、九月十日、第一陣が到着、院



多聞国民学校の女子児童（第一陣）

庄駅や古川の十字路で多数の児童に出迎えられ、宿舎である浜屋旅館で歓迎会が催されました。続く九月十八日には第二陣が到着。谷口旅館と対

泉楼を宿舎として、合計九十四名の児童達は芳野国民学校へ通学しました。

児童達は、見知らぬ土地でホームシックになって泣いて先生に叱られたり、都会では経験したことのない膝まで積もった雪の中を通学したりと、親元を離れて生活する不安と寂しさの中、芳野村の人々は疎開児童達を家に招いて風呂を貸したり、食糧難の中はつたい粉を作ったり、栗や柿を差し入れるなど親身になってもてなしました。

そして昭和二〇年八月十五日、終戦を迎え児童達はようやく家へ帰れるとささやき合い、帰るまでの二ヶ月が長く感じたそうです。十一月三日、芳野村主催で送別会が催され、翌日、地域の皆さんからもらった弁当や土産を手にとり、たくさんの人に見送られながら神戸へ帰っていきました。

一方、多聞国民学校の男子児童は、津山の愛染寺と本源寺に集団疎開していましたが、そのうち愛染寺に疎開していた二十七名が昭和二〇年四月から小田村の極楽寺に宿舎を移転し、小田国民学校へ通いました。こ

こでも農作業を一緒に行ったり、家に招いて食事をしたりと手厚いもてなしを受けたようです。

同じく津山に集団疎開していた荒田国民学校男子児童達のうち三、四〇名も、昭和二〇年七月、円宗寺にあった大同協会の建物に宿舎を移転し、大野国民学校へ通っています。

この児童達は、敗戦後の枕崎台風で宿舎が水浸しとなり、吉祥寺や円通寺を宿舎として三か月余りを過ごしました。香北小学校の昭和二〇年一〇月二十七日の学校日誌には

「神戸荒田校疎開児童来校野菜（本校児童持参セシモノ）持帰り」とあり、近隣の村からも温かい援助があったことがうかがえます。

戦後四〇年が経過した昭和六〇年（一九八五）、当時の疎開児童のうち四名と教師一名が、思い出の学び舎・芳野小学校を訪ねました。一行は、芳野小の当時の校長や恩師達と対面し、思い出の場所や旧知の人を訪ね、



香北小学校の学校日誌

疎開児童が建立した記念碑
(芳野公民館敷地)

当時の楽しかったこと、辛かったことなど話をはずませました。そして、翌年閉校を迎える芳野小学校へ何か役立つものを贈りたい、また記念碑を当地に建立したいと申し出、学校跡地（現芳野公民館敷地）に記念碑が建立されています。極楽寺に疎開していた男子児童達も四〇年後に鏡野を訪れ、旧交を温めています。

今年で戦後七〇年を迎えます。戦争によって子供達までもが厳しい生活をしなければならぬ時代は二度の中でも親身におもてなしをしていた、当時の人々の温かい心遣いはいつまでも持ち続けていたいものです。

参考：『閉校記念わすれなぐさ』『鏡野町史』通史編『岡山県史』近代Ⅲ『岡山県の百年』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733